

共催：チェチェンの子どもたち日本委員会/日本国際フォーラム・チェチェン問題研究会

後援：チェチェン連絡会議

チェチェン問題公開ディベート 岡田一男VS菊池由希子

「テロと暗殺のはざままで

世代の壁は超えられるのか？コーカサスに平和を実現するために」

2010年6月12日（土曜日）18:30～21:00

場所：文京シビックセンター 5F 会議室C

菊池由希子（国際関係スペシャリスト）

岡田一男（チェチェンの子どもたち日本委員会）



岡田：

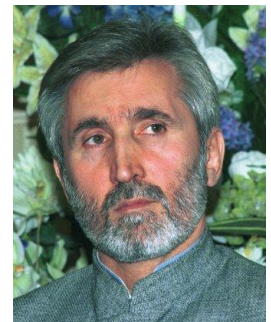
私は共催団体となっている「チェチェンの子どもたち日本委員会」の共同代表のひとりである岡田一男と申します。「チェチェンの子どもたち日本委員会」というのは、チェチェンの国内での子どもたちに対する医療支援とか、チェチェンから、難民として、自分の意思に反して流出しなければならなかった人たちの間で行われている子どもに対する文化活動を支援することを進めていこうということで始まった小さな集まりであります。もともとは非常に高名な外科医で、ロシア兵あるいはチェチェンの一般市民、戦闘員を差別することなく医療に携わり、最終的にアメリカに亡命せざる

を得なかったハッサン・バイエフという医者、『誓い』という本を出しているわけですが、その著者を招こうと集まった組織です。もともと、今日の会合を後援しているチェチェン連絡会議のメンバーが中心となって始めた組織です。もう少し外へ広げようということで、東京以外のいろいろな地域の人とも連携を構築しようということで、兄弟組織として存在しているわけです。

それから、今日は日本国際フォーラムのチェチェン問題研究会伊藤先生のご支援を受けまして共催という形で今日もたくさんのスタッフの方たちのご支援くださっています。我々がチェチェン問題に関心をもつよりもかなり早くから日本国際フォーラムは、チェチェン問題に注目して来られ、とりわけ1997年だと思いますが当時のチェチェンの第一副首相であったホジ＝アフメド・ヌハーエフを日本に紹介するというのもおやりになっています。ということで、伊藤先生に少しお話をいただければと思います。

伊藤憲一：

ただいまご紹介にあずかりました日本国際フォーラムの伊藤憲一です。私どもがチェチェン問題に関心をもつようになったきっかけは、1996年12月のことです。1994年から95年にかけて第一次チェチェン戦争という、チェチェンから見ると独立戦争ですが、それをロシアと戦ってチェチェンが勝ったんですね。1996年から99年までチェチェンには立派な共和国があったのです。大統領がいて、首相がいて、外務大臣もいて、平和に国際社会とかかわりをもっていたわけです。そういうなかでチェチェン政府がヌハーエフ第一副首相を団長、チマーエフ外相を副団長とする総勢11名の代表団を各国に派遣する中で、「日本にも派遣したいが、引受け団体になってくれないか」というので、私ども日本国際フォーラムが引受け団体になって、



日本にお招きしたわけです。このときは、ロシア政府から日本政府に「入国査証を出さないように」という、すさまじい圧力がかかり、私も対抗し外務省に出かけて「第三国の圧力に屈するべきではない」と、当時の外務省の幹部に働きかけたものです。外務省はたいへん悩んだようですが、結果的には査証を出してくれたんです。ただ、査証に書かれたかれらの肩書きを見たら、「いわゆる第一副首相」、「いわゆる外相」と書いてあるんですね。「これが、いろんな意味で日本外交の実態なんだろうな」とは思いました。善意の外交をやっているけれども、最後には強い者に屈する。まあこのときは査証を出しているのだから、完全に屈したわけではないですが。このときは、1週間くらい東京に滞在して、その間私たちはいろいろな機会を作って、かれらを日本の各界のリーダーたちに会わせました。当時は、ロシアも停戦協定を結んで、チェチェンの独立を事実上認めたような雰囲気がありましたから、今とは全然状況が違います。



そんな状態が3年くらいも続いたあとに、ご承知のとおりモスクワで集合アパート爆破事件が起こって、またロシアとチェチェンの関係が急激に悪化しました。100人を越える死者が出て、「これはチェチェン人がやったことだ。けしからん。もう一度攻め込んで、今度こそチェチェンをロシアのものにしてしまえ」という声が高まり、第二次チェチェン戦争になったわけです。これはエリツィンからプーチンに政権が移行する過程で起こっています。ところで、チェチェンのことを研究している人は、だれもモスクワのアパート爆破事件の犯人がチェチェン人だとは思っていません。独立を勝ち取ったばかりのチェチェン人が、なぜそんなことをする

必要があるのか。むしろ、ここは「無難に」というのが、チェチェン人の立場のはずです。プーチンの意を受けたKGBが、アパートを爆破したことは間違いありません。いろんな証拠が出ています。爆破に使った特殊な爆発物はKGBの工場でしか作れないとか。その後、1999年にロシアは再びチェチェンに攻め込んでゆきますが、その戦争を正当化する理由の一つがこのアパート爆破事件でした。この戦争の結果、犠牲になった子どもたちがたくさんいるんですが、その子どもたちのお世話をしようというのが、岡田さんたちの「チェチェンの子どもたち日本委員会」です。日本国際フォーラムは外交国際問題のシンクタンクですので、調査・研究やそれに基づく政策提言を主たる活動内容にしているのですが、その分科会の一つに「チェチェン問題研究会」があり、岡田さんたちとは、ときどき協力しているいろんな催しを一緒にやっています。

強大な民族が周辺の弱小民族を軍力で征服して、植民地にするというのは、かつて英、仏、スペイン、ポルトガルなどの帝国主義国家がやったことであり、日本も身に覚えがありますが、20世紀後半の民族解放運動の過程でほとんどの植民地は解放され、独立しました。それなのに、いまだにこの植民地支配をやっているのが、ロシアと中国です。中国がチベットやウイグルを支配しているのは、武力による植民地支配ですが、ロシアのチェチェン支配もその一種です。21世紀になっても、まだ残っている人類の恥部の一つです。チェチェンというのは日本から見ると遠い国で、他人事のように受け止めている日本人が99.99%ですが、今日ここに集まった人たちは、せめてチェチェンの人たちの苦しみや悲しみの何百分の一かでも、共有してくださって、かれらの運命に共感を寄せていただければと思います。

岡田：

それでは始めに今日話を展開していくやり方についてお話します。菊池由希子さんにまず話の中心になっていただこうと思っています。菊池さんは、生まれは1983年、青森県弘前の出身ですが高校生のころからチェルノブイリ原発のさまざまな支援活動に参加されて、旧ソ連地域のいろいろなことに関心を持つようにな

って、2002年からモスクワ大学国際関係学部に留学されて、その中でもチェチェン問題に関心をよせて、それを自分の研究テーマに選ばれた。ロシアの名誉のために申し上げますが、モスクワ大学とか科学アカデミーには、まだそういう問題を研究する自由が存在しています。かなり踏み込んだ研究を彼女はすることができたと思います。ただロシア政府そのものとアカデミックな世界というところでは違いがあるという意味で、菊池さんが経験されたことはロシアではどういう自由があって、どういう不自由が存在しているのか、そういったことを考えてみるのには非常にいいケースだと思います。

2008年の6月にモスクワ大学を卒業されたのですが、4年生のときの論文で、「チェチェン難民と露欧問題」に関する論文を書き、そのあと「コーカサス地域の平和構築」というテーマで卒論を書かれました。面白いものをおかきになったところへ、2008年の夏というのは、ロシアがチェチェンよりもグルジアに難癖をつけて、アブハジアと南オセチアという自治を行っている地域をグルジアから独立させる、実質的ロシア領にしてしまうということをやってきて紛争が熱くなり、はなはだ非人道的なことが行われました。そのことにも関連して、菊池さんが日本に戻ってきたので、伊藤先生と研究報告会をしました。そのときは「戦乱のコーカサスの平和構築」というテーマで、そのときの彼女の報告は、チェチェンの子どもたちのサイトに載っていますのでごらんください。

<http://chechenchildren.jp.org/event080905.htm>

ところが、菊池さんは、モスクワ大学の博士課程に進学するのでモスクワに戻っていきましたが、入国査証を持っていたのに入国拒否を受けているといわれ、そのまま空港から強制送還されるということがありました。2008年にそういうことが起こったわけですが、当時チェチェンの情勢はかなり安定したといわれていました。廃墟というものが見当たらなくなったり、一定の自由が実現されるということがあって、以前のように何もわからず連行されたりすることはなくなり、一見、人権も配慮されているように見えてきたのです。

が、一方で抵抗運動に関係しているという人間には非常につらい処分が下されたりして、人権活動家が神経をとがらしていたのは、一族の中から武装抵抗運動の参加者を出した場合、同族、家族、親戚であるということを利用して迫害をする、ひどい人権抑圧が行われました。スターリン時代でも、少なくとも政治犯とされた人たちの妻や息子や親だからといって迫害を受けるということはありませんでした。現在のチェチェンでは武装抵抗勢力に一人でも家族から出ている場合、ラムザン・カディエロフ大統領の言い方によれば一族は深刻な事態になると思え、深刻な事態とは何を意味しているか想像にまかせますが、そういう法の無視がまかりとおっている状態です。



見た目では非常に繁栄が謳歌されていまして、グローズヌイではほとんど廃墟がなくなっただけではなく劇場が再開されて、ロンドンに亡命している元もと俳優であったザカーエフ（首相）に、グローズヌイに戻ってきてここで芝居をしろとか言っているのですが、その一方で立て続けに、菊池君がモスクワに戻ったらフィールドワークをやろうと思っていたチェチェン在住の人権団体の女性指導者たちが暗殺されてしまったとか、まがりなりにもロシア占領下でもやれていたいろいろな人権擁護活動ができないような状況ができています。今回は資料のとおりしゃべろうと思っているのではなく、レジメにあることは基礎情報として作ったものです。ではまず2008年の入国拒否前後から現在に至るまでの状況、とくに若者の中で過激な思想に走る人が多くいるわけです。その問題についてお話していただきます。



菊池：

はじめまして、菊池由希子です。私は2008年にモスクワ大学の国際政治学部を卒業しまして博士課程に進学する予定だったんですが、秋にモスクワに戻ったところ、有効なビザがあったのにもかかわらず入国拒否

され、国防の脅威であるという理由から入国禁止となりました。今パリに渡って1年半になります。学生時代からチェチェンの同世代の若者たちとつながりがあって、研究をしながら支援活動もしていましたし、友達としても彼らとずっとつきあってきたので、私はどちらかというインサイダーなんです。

でも今回レジユメを作ったときに、最初は一人で講演する予定だったんですが、ちょっと主張が過激だということを岡田さんに指摘されて、今の日本ではそのような過激な発言は受け入れられないということで、皆さんを驚かせないためにもディベートにしようということになりました。今回、岡田さんにはソ連世代のチェチェン人代表として、私は若者世代のチェチェン人代表としてここに立ち、世代間の意見の違いを皆さんにリアルに感じてほしいと思ったのです。

2008年までというのは、エキスパートの間でも支援活動をしている人たち、特に国連は撤退をし始めていましたし、激しく空爆をしているわけではないので、ジャーナリストもあまり行かないとか、もちろん規制も厳しかったので、危険を冒してまで行くことをしなくなる人が多かったです。また、その当時多くの人の間でカディエロフを高く評価する動きもありました。ちょうど、その頃私は論文を書きながら、何度かチェチェンにも行って、見た目は復興しているんですが、その陰で何が起きているか見てきました。

2008年に強制送還されたとき、周りは驚きましたが私は当然の結果だなと思ったのです。私が知っていることと皆さんが知っていること、それを比べると私が国防の脅威だとされたことは納得できたんですね。空爆をしているとき、大規模な戦闘行為をしているときは皆さんが注目しているんです。でもそれがひいていったとき、若者の心の中にどんな思いがあるか、どんなことを思っているかということを知っていた人は少ないと思います。特に空爆をしていた頃チェチェンに行っていた人は、私より少し上の世代ですが、今戦っている人たちというのは20代、30代前半くらいの、教育も受けていない、職業訓練も受けていない世代です。

2008年の夏にグルジアとロシアの戦武力衝突が起こり、2009年の7月にはナターリア・エステミーロヴァが殺されました。私も一緒にプロジェクトをやっていた人で、当時、彼女は50歳でした。彼女は当時カディエロフと口論していたんですけど、その内容はスカーフに関する政令についてです。チェチェンの女性たちはアラブ人のように全部ではなく、バンダナ程度でいいので、公共の場所ではスカーフを絶対着用しなければならないという政令をカディエロフが作ったんです。

それに対してナターシャはチェチェンがもしロシアの一共和国だとしたら、それは個人の自由を奪うことになる、と激しい口論になって、カディエロフは怒ったそうですが、それに対しメモリアルの同僚たちはナターシャの身の危険を心配して、彼女を3ヶ月ロンドンに送ったんです。ロンドンに行く直前に私はモスクワで最後に会いました。秋にはチェチェンに戻って以前のように非常に活発にいろんな問題を追跡していたので、いつ殺されてもおかしくなかったんです。殺されたときはショックでしたが、彼女も覚悟はあったと思うんですね。だから殺されてしまうことは本望だったのかもしれないと思って、合理化して考えるようにしていました。

しかし、それから1ヶ月もたたないうちにオフィシャルでもプライベートでも親しかったザレーマ・サドゥラーエヴァという私より9歳年上の方が殺されました。2006年に私はイムランという少年を日本に連れてきて弘前大学医学部の病院で手術をさせたんですが、そのとき皆さんからたくさん寄付をいただいて、お金が余ってしまったので、その寄付金で岡田さんが支援しているハッサン・バイエフの団体や、ザレーマの「スパシヨム・パカレニエ」、若者の世代を救おうという意味の団体ですが、そういう団体に寄付しました。これがきっかけで私はザレーマと知り合いましたが、活動家としては非常に若いんです。たいてい活動しているひとは50-60歳が多いです。彼女は人権活動をしていたわけでも政府批判をしていたわけでもなく、地雷で怪我をした子どもたちや病気の子どもたちを助けていたのです。だから殺される理由はなかったはずなんです。

ザレーマについて書いているジャーナリストは少ないので、なぜ殺されたのかということ私なりに分析しました。ザレーマは2008年秋に結婚して、相手はグローズヌィの牢屋に入っていた元戦士でした。彼女は何年も待ってやっと出てきたところで結婚し、殺されたときまだ1年もたっていなかったのです。しかも彼

女は妊娠していました。でもその二人を真昼間に武装した人たちが連行し、翌朝ザレーマの夫の車のトランクから遺体が出てきました。その時カディーロフは、血の復讐というチェチェンの掟、要するにあだ討ちによるものだと言ったのです。つまり、夫は敵が多かったので、それによって彼女も殺されてしまったというのですが、コーカサスの人なら誰だって知っていますが、あだ討ちで女が殺されることはないんです。私は犯人が当局の人間と決め付けていますが、なぜかというと昼間に武器を持ってグローズヌイの市内を歩き回れるのは当局の人間しかいないからです。

なぜザレーマが殺されなければならなかったのか。もしかしてナターシャと仲が良かったので、ナターシャについて何か知っていたのかもしれない。でももしザレーマも知っているようなことだったら、ほかの人権活動家も知っていたはずです。でも殺されたのはなぜかザレーマ。考えられる要因として、まず彼女が若かったので、見せしめにはちょうどよかった。また、ザレーマはとても信仰心が強かった。ナターシャはお母さんもロシア人で、イスラム教徒でありながらそれほどイスラム教徒らしい格好もしていないし、ロシア人と間違われるような人だった。ザレーマは2008年くらいから首も隠れるようなスカーフをかぶって歩いていた宗教心の強い人。

さきほど言ったようにナターシャとカディーロフがスカーフのことでもめたんです。まずスカーフをかぶらないナターシャを殺した、次は原理主義者と疑われるほど首まで隠れるスカーフをかぶったザレーマを見せしめとして殺した。彼女の旦那さんが元戦士だったということをお口にすれば殺しやすかった。旦那さんのせいにして彼女が巻き込まれたように見せるという意図もあったと思います。

ナターシャは2発、胸と頭を撃たれてそれほどむごい死に方ではなかったけれど、ザレーマは妊娠中だったにもかかわらず遺体には無数の青あざがあって、手首と鎖骨が折れていたんです。旦那さんに関しては情報がないんですけど、人権活動家たちからの話によると強姦されていた跡があるというんです。今、チェチェン当局で働いているのはチェチェン人です。昔は男性同士がケンカしたときに、女性がスカーフをそこに投げ入れたら男性たちはどんなことがあってもケンカをやめなければならぬくらい、女性を敬っていたはずなんです。それが今は、単に一発か二発銃弾を浴びせればいいところを、とてもむごいことを、命令だからといって、しかも旦那さんの前でやったかもしれないのです。それくらい今のチェチェンのモラルというものはこの戦争によってずいぶんと下がってしまったと思います。

そして2009年の半ばから2010年にかけて戦闘行為がずいぶん増しました。2009年の4月に対テロ掃討作戦レジームを解除しました。つまり、もうそこにはテロリストはいないということです。1999年の9月から続いていたテロ掃討作戦体制というものは昨年4月からなくなりました。10年以上続いていた体制がなくなり、自由に人々が行き来できるようになり平和な地域になったと、公式発表されました。ロシア軍の撤退も決められました。4月15日がその日だったのですが、その前の1年間とその後の1年間を比べるとその後の方が死者や負傷者が増えているんです。

データを比べてみましょう。昨年4月15日以前に殺された市民の数は18人でした。それから1年間2010年4月15日までに殺されたのは20人あまり変わりません。負傷者は25人だったのが34人、ちょっと増えてます。爆発はどうかというと、59だったのが63に増えてます。戦闘行為は86だったのが133になってます。武装勢力の戦士たちの死者は169人だったのが189人、逮捕者もしくは自分から投降してきた人は136から186です。そしてF S Bなどロシア側の当局の負傷者は150人が185人、死者は52人から97人、2倍近く増えてます。爆発に話を戻すと、昨年は自爆攻撃が多かった。4月15日までは1件だけだったのが、その後1年間に9件もありました。これはチェチェンだけのデータですが、たとえば北コーカサス全体では2009年の1年で17件の自爆攻撃がありました。80人以上の死者、350人以上の負傷者が出ています。

このようにテロはなくなったといわれているチェチェンですが、事件は増えています。特に戦士の死者数、

逮捕者はそれほど増えていないにも関わらず、増えたのは警察や当局の死者数です。そして自爆行為も増えた。なぜこのような動きが出てきたのかというと、もちろん武器の不足もあると思います。それから宗教的に自爆攻撃を正当化し、新しい戦法として用いるのを主張したというのもあるからといいますが、私が思うには、自爆攻撃でなければ確実に殺せないからです。

確実に要人を殺すというのが2009年の一連の事件でした。たとえばイングーシの大統領が狙われて、当初は危篤状態にまでになったり、チェチェンの内務省も狙われたし、イングーシの内務省も爆破されました。もちろん市民の中にも近くにいた人が犠牲になったということはありますが、やはり当局の施設、警察、要人などがターゲットになっていました。

しかし、おかしなことが起きたのは、2010年3月。モスクワで地下鉄連続爆破事件が起きました。すぐにチェチェン人の女性がやったのではないかという情報が出されました。その後、最初に判明したテロリストの犯人は17歳のダゲスタンの少女だった。彼女は元有名戦士の妻で、二人の写真は日本の新聞記事にも出ましたが、私はこの写真がすごく疑わしいと思うんですね。



もし、彼女たちは過激派で有名戦士の奥さんだったという公式発表が正しいとしましょう。写真では彼女がアラブ人のような真っ黒な衣装を着て、旦那さんと腕を組んでピストルを持ってるんですね。非常にプロパガンダには都合のいい写真ですし、実際に撮ったのかもしれないですが、私はそれが偽造写真じゃないかと思ったんですね。コーカサス人のメンタリティから考えると、戦士とその妻ですから現代っ子だけ考え方はとても古風で保守的なカップルなはずです。自分の奥さんと触れ合っている写真を撮るというのがおかしいんです。それを恥ずかしいと思うような人たちなんです。ですから、私はこの写真はおかしいと思った。

あと彼は有名な戦士だったので、奥さんがその後生き残る可能性が大きいのです。実際彼が殺されたのは昨年末。その後も彼女はロシアの法律に基づいて生きていかないとはいけない。その彼女に危険が降りかかるような写真を残すだろうか。私は何人も戦死の奥さんだった人を知っていますが、実際二人で撮った写真を持っている人はいない。もしかしているかもしれないけど、他人に見られたら困るというものもある。

それから、もう一人の犯人と言われているのが、マリアム・シャリーポヴァという27歳のダゲスタンの学校教師だった人です。彼女に関してもなぜおかしいかというと、お父さんがインターネットで公表された遺体の写真を見て、これは自分の娘だと気づいて、ノーバヤ・ガゼータに電話してきたそうです。実際に遺伝子検査もしたらマリアム・シャリーポヴァだったという話なんですね。

ただ、なぜおかしいかと思うと、事件があったのは29日の早朝7時、8時台のことですが、彼女は前日の午前中までダゲスタンにいたというのですよ。それはお母さんが証言していて、お母さんと娘が警察のところにいたお父さんに電話してきたらしいんですね。警察が電話の会話が聞こえたと言っているわけです。その証言が正しいとしたら、彼女は28日の午前中までダゲスタンにいたということになります。しかし飛行機に乗った形跡もない。もちろん偽造パスポートを使って出かけることもできたでしょうが、もし陸路で行ったとしたら少なくとも35時間かかってしまうので翌早朝までにどうやって移動したのか、誰もその問いに答えられない。

彼女は数学と心理学を専攻していた人で、学校教師をしていた人でした。その他に、彼女の旦那さんが戦っている戦士だったと当局が発表しているんですが、まだその男性は生きていますので、それがおかしいとい

うひとつの理由でもあります。お父さんはインタビューで、娘が戦闘員と結婚していた事実はないというんですが、もし事実だったとしたら、お父さんは隠しているのかもしれないけども、あり得ない話でもないで私は何とも言えません。そして誰の仕業なのかというところですが、この事件後すぐに今の抵抗勢力のリーダーがこの犯行声明を出したんですね。その犯行声明のビデオを見た、特にチェチェン人たちが言うんですが、ビデオに映っていた新緑がおかしいのだそうです。あと、口の動きが声にあっておらずおかしいというんですね。だからこれは偽造なのではないかという説もあります。

2009年の戦略は要人を殺す。今回は違う。二つのメトロの駅はF S Bの目の前の駅と内務省の近くの駅ですが、メトロを使うのは一般人です。外に出てF S Bに入ろうとして取り押さえられたところを爆破したというのならわかるんですが、メトロの中で爆破しても死ぬのは一般人だけじゃないですか。これは2009年、2010年と続いている自爆攻撃の戦略とは全然違うと思います。これは上の指示でやったとは私は思いません。もしかしたら指示を聞かないグループがやったのかもしれない。でもこれは上の指示ではないと思います。

この事件を当局が仕組んだのかどうか別として、十年前イングーシは、チェチェン・イングーシ共和国だったんです。それが、チェチェンは独立を求め、イングーシはロシアに残ることを決めたんです。ダゲスタンもそうです。ロシアの一部でいたいというのが彼らの意思だったんです。だから以前の自爆攻撃はだいたいチェチェン人が犯人でしたが、今回はダゲスタンの女性でした。もし政府が仕組んだ事件だったとしたら、チェチェンは復興していることになっているのでチェチェン人だと都合が悪かった。もし彼女たち自身の意思、もしくはダゲスタン人の意思が働いていたとするなら、前はチェチェンだけで行われていた人権侵害がこの十年で北コーカサス全体に広がってしまったということになるんですね。

そしてプーチンが面白いことを言ってます。99年のアパート爆破事件のときは、犯人を見つけたらトイレの中で溺死させてやるとか言ったんですね。今回は配水管の底から搔き出して、殲滅すると言ったんですね。今パリに住んでいますが、フランスで難民が住んでいるような欠陥住宅だと、ゴキブリがひどいんですよ。それこそトイレで見つけたら見えるので叩き潰せばいい。でも、ヨーロッパのゴキブリは性質が悪くてどんどん増える。いろんな方法を試みて駆除してもまだいる。どこにいるかという、水道管にいるんです。水道管は見えないし手も入らない。プーチンも若かったころ、ゴキブリと住んでいたんじゃないかと思いました。それから十年前は目に見えるところに武装勢力・反政府勢力の人間がいたので、殺そうと思えばすぐ殺せた。でも今はどこにいるかわからない、掃討作戦しても殺しきれないというプーチンの切羽つまった気持ちがよくわかったんですね。



でも、戦士が戦うのは正しいという私の意見に、それは過激だと岡田さんが打ち合わせのときに言っていました。2010年の3月に殺されてしまったんですけど、ちょうど2008年中ごろから2009年にかけて、それまでアラブの大学で勉強してモスクワのイスラム系の出版社やモスクで働いていた27歳のブリヤート人、通称サイド・ブリャツキー、アレクサンドル・ティホミーロフという男性が戦っていました。彼はとてもカリスマ性のある人で、格好いい。声も頭もしゃべりもいい。それほど聞き手にイスラムの知識がなかったとしても、彼の話の聞いていると言っていることが正しいと思えてしまう。北コーカサスの男性だけでなく、カザフスタンからも彼の影響を受けて戦いに行く人たちが現れたり、戦闘員の中にチェチェン人以外も増えてきたんですね。

自爆テロを洗脳したのは彼だとロシアのマスコミや当局は言っていて、今回のモスクワの自爆テロもサイド・ブリャツキーが女の子を洗脳してやらせたと言っていますが、彼の書いたものや言っていることから、私はそれはでっちあげだろうと思っています。ただ、サイドの話の聞いていると自爆攻撃はイスラムで禁

止されている自殺行為にあたらぬという自爆を勧めるようなことを言ってます。しかしそのおかげで戦闘行為は活発化され、戦闘員の死者負傷者は前と変わらないにも関わらず、警察や当局の死傷者数は倍以上になったわけです。

なぜ彼がそこまでカリスマ性を持てたかという、教育を受けていない私の世代のチェチェン人は、自分のことを書いたり人前で話したりしてアピールすることができません。それからマスコミに情報操作されてしまう。私たちの世代についてしゃべらせてくれと言っても、平和な時代になったんだから黙っていてくれ、君たちはテロリストでいいとされてしまう。そんな風に社会的に追いやられ、公に発言することができない世代のチェチェン人に代わってサイドはエッセイを書いたんです。

その中にいろんな殉教してしまった戦士が出てくるんですね。たとえば一緒に戦っていた友人が死んだと。その死体のある場所に1週間後に行ってみると、遺体は通常のようにたずらされたり持ち去られたりせず、顔に上着がかぶせられていた。サイドは遺体に敬意を払った敵を立派だと評価しました。それから、ロシア兵が捕まった時、イスラム教徒になって俺たちの味方につくか死を選べと言ったところ、ロシア兵が殺してくれと頼んだのだそうです。一時的にウソをついて死からのがれるのではなく、潔く死を選んだことを評価しているんです。

サイドはすごく人間的な人だったと思います。ロシアのマスコミからは「ロシアのビンラディン」と言われたり、イスラム教を勉強していたけどそれほど優秀じゃなかったとか、いろいろ悪く書かれていたんですが、彼が死んだあと、お母さんの手紙をインターネットで読んだんです。民族性についてもロシア人だとかブリヤート人だとか言うけれど、混血でいろんな血が混ざっているとか、サイドは仏教徒にもキリスト教になったこともない、他の宗教を裏切ったこともない、他の宗教に対しても敬意を払っていた人だったということが書いてありますから、あれは本物の手紙だと思います。

実際モスクワでも幸せな生活を送っていたし、キャリアもあった人なんですけど、それを全部捨てて山に戦いに行った。私たちが失うとわかっていて戦いに行くということがどれほど大変な選択だったかわかるでしょう、サイドが何をしたかったのかわかるでしょう、とお母さんは書いています。そこで私が思ったのは、そういうブリヤートやほかの地域からも、このままではいけないと思ってロシア政府の不正に対して立ち上がる人がいるんだということです。サイドが戦いたいとか人を殺したいとか、そういうことじゃないと思うんです。モスクワという都会でも不平等が存在して、その不平等に対して立ち向かったんだと思います。そういうこともあって彼を評価しているんですが、その辺が岡田さんと異なるのでマイクを譲りたいと思います。

岡田：

どうもありがとうございます。

非常に興味深い話をしてくださったわけですが、いくつか言っておきたいことがあります。まずひとつは、サイド・ブリヤツキーですが、一般的なのがサイド・アブサード、またはアレクサンドル・ティホミーロフという本名で呼ばれていたこともあります。非常に注目されていた人物であることは事実です。僕も注目していましたし、彼が書いたものは少なくともほかの人たちと比べると、僕は無神論者ですから、客観的にこういったものを見ているわけですが、非常に綺麗なロシア語で説得力もある。いろいろな自分と一緒に戦った人の思い出を書いたり、そういう人物だということは知っていましたが、チェチェンで戦っていた人たちというのは、必ずしもチェチェン人だけではありませんでした。

第一次チェチェン戦争のころからいろいろな義勇兵が来て、ロシアと対抗するために戦っていきました。中でも有名なのはウクライナ人たちの中隊でしたし、在ロシアの朝鮮系の人たちもチェチェン独立戦争に参加しています。第一次チェチェン戦争のときはかなりたくさんの方のそういった非ムスリム外国人義勇兵が来ています。このことは後にあまり語られなくなっていますが、そういった形である意味でチェチェンの戦いと



というのはロシア全域の民族の代理戦争みたいな側面もありまして、私は第一次チェチェン戦争のころショックだったのが、日本にいくつかのロシア共和国が在日代表部を作っていたんですね。

その中にブリヤート共和国のとなりにサハ共和国というのがあるんですが、カザフスタンより大きな地域を占めているんですが、そこの代表が自分たちのことのようにチェチェンのことを語っていました。とにかくロシア人に一発かましてやったんだ、と言って、この連中はいったいどういうことを考えているんだと思ったこともありました。そういった意味で、必ずしもサイド・ブリャツキーが最初の義勇兵ではない。

有名な人物ではハッターブというアラブ人司令官がいました。アフガニスタン、タジキスタンで戦った末にチェチェンにやって来て独立戦争に参加した。そしてチェチェンで殉教していったアラブの義勇兵というのたくさんいます。片方でワッハーブ主義という、本人たちがワッハーブ主義ということは言っていないので、ワッハーブというのは「いわゆる」という言葉でいわなければならないのですが、チェチェンの伝統的なイスラムとは違うものを外から持ち込んできたということがあって、このことが本人たちは純粋なイスラムを信じているということがあるんでしょうけど、チェチェンにおいては非常にネガティブな要素も持ってきている。まずなぜワッハーブ主義が現れたのかということの中に、実はロシア側が持ち込んだという恐ろしい事実があるわけです。要するにテロリズムというのは相手を脅かしてその人たちの意識を操作することにあるかと思うんですが、ひとつは土着的というか、伝統的なイスラム、スーフィズムの指導者たちを脅かして彼らをロシア側に引き寄せるために逆に過激なワッハービズムをチェチェンに持ち込んだ。

ですからどういった連中が支援したかという、まさにF S Bが後ろで糸を引っ張っていたり、あるいは現在ではプーチン首相と対抗しているの、逆にチェチェンの独立を支持しているような顔をしているベレゾフスキーといったオルガルヒも、ロシア大統領エリツィンの側近として活躍していたころは、マスハドフ大統領をゆさぶるためワッハービズムを支援していた。そしてワッハービズムが支配している政治的グループに対して、本来ならばチェチェン政府に渡さなければならない資金をそちらに横流しするということがやられていたわけです。そういったことをやっていた。

ベレゾフスキーが片方で、現在の独立派の一部を支持しているということがどうなのか、ということが問題になっているのです。有名な人として、アレクサンドル・リトビネンコという人がいるんですね。リトビネンコは非常に善意の人だと思ってますし、リトビネンコは本当のことを言おうとして殺されたんだと思っていますけど、ベレゾフスキーとのつながりとい点は、否定できない。逆にベレゾフスキーの支援金を受けているリトビネンコは真相を本当に語るができるんだろうか、ということがありました。

共通の友人の中に「リトビネンコ暗殺事件」という映画をとったアンドレイ・ネクラーフという監督がいますが、彼はリトビネンコの臨終に立ち会った人ですが、リトビネンコが彼に言ったことに「これで僕が言っていることは本当だということが、君にもわかったろう」ということをネクラーフが聞いているんですね。リトビネンコは信用してもらえなかった、ということを常に悩んでいたのではないだろうかと思っています。ワッハーブ主義の問題というのはそういった形で非常にいかがわしいものが片方あって、片方に純粋に信仰している若者がいるのも事実だと思います。

ただ最近の非常に危機的な状況というのは、チェチェンの独立派の指導者ドカ・ウマーロフという言葉が菊池さんも言ったんですが、ドカ・ウマーロフという人は96-97年の戦間期に人質ビジネスをやった人物なんです。人質ビジネスとは、まず誰かを人質にとるわけです。するとロシア政府が解決金を出してそれによって身代金が負担されて、人質が解放されるというわけですが、ロシア政府から出た金をF S Bと一部



のチェチェン独立派と称するギャング団みたいな連中が折半している。このこともリトビネンコが明らかにしたことです。彼はその集金に行かされた。すると解放されたはずの人質が、FSBの施設内の暖房のラジエーターに手錠でつながれているのを僕は見たと証言しているんですね。

そういった形で明らかに当局と結びついた腐敗した連中というのが独立派の中にも存在してきた。ドッカ本人は、おろかなことであったと自己批判したというんですが、そういう汚点のある人を最高指導者に選ばれざるを得なかった、要するに、ほかに誰もいなくなったという要素が多分にあったということでしょう。

チェチェンの武装闘争は、ある意味では安上がりな戦い方をしているわけですね。司令官は、部下に対して決してお金を渡しません。司令官は食費を負担して一緒に戦う間は部下の食いぶちを用意するという形で戦いをしているわけですが、それでも戦争をやるということはかなり金がいるわけですね。その金をいったいどこから集めてくるのかということで、もちろんチェチェンの中での戦費調達もありますが、だんだん集められなくなってきて、武器の調達も難しくなってきたとか、いくつかの要素が戦争を続けるのが難しくなってきた。

その中で本当に戦争をやるのがいいんだらうかというもうひとつの問題となってきた。特に最近ロシア側の作戦は、指導者を狙い撃ちしており、本当に経験のある指導者がいなくなりました。若い人々で戦闘員になりたいと思っている人は少なくなっていないはず。ただこうした若者に供給できるだけの武器もない中で、チェチェンの中で戦いが少なくなっていた理由というのが以前のような権威が確立できなくなってきてしまったと考えます。ですからいろんなことを見直さなければならない。

2月のことなんですが、私が現在注目している人イサ・ムナーエフという元野戦司令官がコペンハーゲンにいます。今アフガニスタンで、タリバンに捕まってしまった常岡浩介君が、イサ・ムナーエフに会いました。私は彼と一緒に質問項目を用意したんですね。実際にイサ・ムナーエフへのインタビューが始まって、私と常岡君がスカイプで話していたときに、チェチェンに残っていた、一般にはマンスールと呼ばれていたアルビ・エフミルザーエフという最後のハジムリート系の野戦司令官が殺されたんですね。最後の司令官とは、いわゆるワッハーブ主義者ではなくて、チェチェンの伝統的なイスラムの指導者で、という意味です。加えてこの人はサウジアラビアにもエジプトにも留学したことがあるという人物でした。

4代目大統領サドゥラーエフという人がいますが、マスハードフが殺されて大統領になったときに彼が占めていた最高シャリアート委員会、日本でいうと最高裁にあたりますが、そこで長官の地位にあったエフミルザーエフ司令官が殺されました。これで最後の司令官が殺されてしまった。あとはワッハービストだけだと。だれも戦える人間はいなくなったと。そこで残された若者はワッハービストの司令官にくっついていくしかないだろうとあって、本当に男泣きをしていたんですが、そういった意味でサイド・ブリヤツキーが出てきたことに僕は非常に病的だと思っているんですね。

少なくとも独立派のワッハービストですらチェチェン人の宗教指導者は一人もいない、要するに宗教指導をできる人がチェチェンの武装闘争してる中にいなくなりました。そのくらいチェチェン人の数が減ってきて一方で菊池君も取り上げたロシアというのはイスラム地域だけに不満があるわけではありません。ロシアには126もの民族がいて満足している民族はほとんどいなくらい大きな民族問題を抱えています。そしてテロが2008年から09年にかけて起こっていますが、ひとつは南シベリアのハカス共和国の水力発電所の心臓部が爆破されています。これはチェチェン独立派がやったんだと自分たちで言っている。

あるはハンティ・マンシースクという西シベリアの油井地帯の製油所の施設が爆破されていますけど、石油と電力というエネルギー中枢部分、あるいはモスクワとサンクトペテルブルグを結ぶ超特急が爆破されるという形で戦略的要衝・・・を持っているものが攻撃されているのですが、そういった事件がチェチェン人とどのくらい関係しているのか、ロシア自体の矛盾というのも全域でどんどん増えてきている。ウラジオストックあたりでも不満が非常に高まってきているといわれています。

休憩

岡田：

パート2の方は、結論的なことをしゃべりそびれています、まずはフロアから質問をいただいてそれに答える形で進めたいと思います。

質問者1：

もう少しチェチェンの若者の状況や日本の若者とメンタリティとか共通しているかとか、教えてください。

菊池：

親世代であるソ連世代は教育を受けているし戦争もなかったし、稼ぐことも結婚することも子どもを養うこともできたし、問題なく暮らせたと思うんですね。でも25歳前後の私たちの世代は、難民になってヨーロッパに逃れても難民認定が取れないでいろんな国にたらいまわしになっています。2年3年の単位で動いて、結局どこへ行っても難民認定が取れないという事態が発生しています。

さらにヨーロッパとロシアは文化が違いますし、コーカサスはもっと違いますから麻薬やスリなど軽犯罪をする人もいるし、もしくはイスラムの宗教心が逆に強くなる人も多い。ヨーロッパ人が人前で露出したりすることに慣れてないものですから、なんだこれはと反発する人もいます。

ヨーロッパに来て、自分で何もできない、上の世代から原理主義者のバカだと言われ、社会的にもテロリストだの盗人だのといわれませんが、子どもはヨーロッパでそれなりの教育を受けて、この子たちがチェチェンの将来だともてはやされるのです。じゃあ、自分たちは何なんだ、と。

チェチェンの男性は、名誉とか自尊心を傷つけられるのが特に嫌いです。役立たず扱いされること事態が耐えられない。そんな中、ヨーロッパで疎外感を抱く。でもロシアにも入れない。そうすると帰る場所は「山」、戦闘のあるところだったりするわけですね。戦闘員になれば祖国を守る戦士だから英雄です。社会的役割も得られるわけです。

たとえばヨーロッパで難民認定をもっている場合は別として、家族を養うことができない。難民認定されていない場合も、奥さんはベビーシッターとか人の家の掃除とか、ばれないように仕事をすることができます。しかし、男性の場合はどうしても外で働くことになるので、警察の目に触れやすい。難民認定をもっていないとリスクが高い。見つかってしまうとロシアに強制送還されかねません。女性と男性では強制送還されたときの扱いが違うと思います。そうすると男性が違法で働くことは非常に難しい。だから稼ぎもない。家族も養えないし難民認定が取れるかわからない。そうすると自尊心も傷ついてくる。

だんだん自分は何をしたらいいのか、何のために生まれてきたのか考えだして、戦いに帰るというケースもあります。もちろん戦いに帰るといっても簡単に帰れるわけではない。特に一度戦ったことのある人や警察に捕まったことがある人は、国境でばれてしまうのでなかなか帰れない。そうじゃない人は帰ってその後山に行けばいい。

チェチェンの中にいる人に関して言うと、戦うとかワハビートとかタブーの用語がありますが、そういうことを言うと当局に目をつけられるし、言わなくても目をつけられて言いがかりをつけられる。夜中に誰かに連れ去られてそのまま行方不明になったり殺されたりという例もあります。チェチェンに残ることもリスクがすごく高い。空爆や大規模な戦闘行為はないけども、実際何かに巻き込まれて失踪する、殺されるといふ例はけっこうあります。

質問者2：

モスクワ特派員をしていましたので、ソ連・ロシアを追っかけています。今日は伊藤さんの日本国際フォ

ーラムからメールをいただきましたので伺いました。以前、日本内科医学会から話をしてくれと言われました。私はチェチェンの話をするといったら向こうの人がビックリして、チェチェンって何ですかというものだから、私は『誓い』の話をしました。しかしお医者さんの反応はあまりなかった。2007年くらいでしょうか。ものすごい攻撃のあった後くらいです。

チェチェンはかなり復興したという話は別に聞きました。今日うかがったところでは、組織的な抵抗ができなくなって、今は自爆テロとか個人的に山に行つてやるということで、こういう小さい抵抗は無限に続くでしょう。しかし組織的な抵抗はなくなってしまったので、プーチンのむちゃくちゃなやり方は成功したんじゃないかと。これからチェチェンはどうするのか。もちろん子どもを救うとかはできるでしょうが、チェチェンそのものをロシアの中から独立させるとかそういう支援はできないんじゃないでしょうか。今日菊池さんのお話を伺つて、岡田さんの話も伺つて、もう絶望的じゃないかと思いますが、どうでしょうか。

菊池：

世界銀行のデータによると、内戦が発生するリスクは24.8%なんですけど一度内戦が起きてまた起きる確率は43.6%に上がるんです。しかも分離主義、独立したいといいたがるのは、石油がある場合は95.5%なんですけど、ない場合は67.6%、チェチェンは石油があるから独立してもやっつけていけるだろうという思惑があったと思います。かたや内戦のリスクは24.8%から43.6%になりますし、1940年から90年までの国際的な戦争において平和合意がされた例では55.5%です。しかし1945年以降起こった内戦で平和条約を結んだデータを取ると35.5%なんです。そのうちの多くが破られて再び戦争が起こっている。2000年代の研究ではあきらかになっています。

1990年代のチェチェン戦争が始まったときはそういったことはわかっていなかったんですが、その当時イングーシはチェチェンから離れてでも戦争を避けたんです。ダゲスタンももちろん避けました。すなわちチェチェンは独立をしたがった。そしてそれが失敗に終わり今に至るんですが、2009年-10年の動きを見て、そのバカだと言われる若者たちは、力をつけたと私は思うんです。岡田さんはそれを否定するんですけど、実際に盛り上げたのではないかと思います。いろんなところで爆破事件とか起こして実際にロシア国内では北コーカサスにずいぶん目がいくようになりました。

モスクワのテロの責任を、やったのが誰かは別として、武装勢力ではなく当局が悪いと考える人が多いというデータでも出ています。4月3-4日で行われた全ロシア国民世論センター調査の結果なんですけど、140都市で1万4千人を対象に行われたもので、57%がテロを未然に防げなかった諜報機関のせいだとして、35%が内務省、つまり警察を批判している。

質問者2：

でも批判していても、ロシア人は兵を動かさないんじゃないか。コーカサスに平和を実現することができるかどうかを聞きたい。

菊池：

このようにだんだん反政府的な動きも盛ん上がってきています。ブリヤートとか他の地域からも戦士が集まったりしています。戦う以外にも反政府的な動きがあります。たとえばアレクセイ・ディモフスキーは、地方都市の警察でユーチューブを使って、腐敗などを何とかしてほしいとプーチンに訴えたんです。その後彼は逮捕されてしまったのですが。このように警察の中にも反政府的な動きもあります。

軍隊にも動きもあります。私の軍人の恩師の話だと、軍部の視点ですが、やはり統制を強める動きがあるようです。たとえば外国人の自由な時間、ロシア人の自由な時間に、何をしているのか調べるとか国民のデータを集めてデータベース化するとか。これは世界でも進んでいます。対テロの名目のもとに一般の人の人権が奪われています。そういう動きが大きくなって、反政府的な行動をとっていると、関係ない市民も殺される確率が高くなってきます。反政府的な動きが勝つのではないかと思います。

別に独立しないほうがいいとは言いませんが、それは彼らの問題ですから、独立問題を議会で解決できるような政治的紛争にもっていけるのではないかと思います。それには何十年もかかるかもしれませんが、このまま統制が続くとロシア国民の不満が強まります。軍隊に息子たちがとられるようになります。すると母親は第一チェチェン戦争のときのように黙っていらなくなります。そのように黙ってても自分たちの命の危険が迫ってくるならば、反政府運動がどんどん盛り上がると思います。ですから未来はないわけではないと信じるようになりました。

岡田：、

チェチェンとロシアの対立というものは400年間続いてきて、今はその中のある局面に過ぎないと思います。そんなに簡単に最終的な独立とかチェチェン民族が自由を勝ち取ることが近い将来にはないと思っています。ただソ連という全体主義体制が70数年しか続かなかったわけです。自分の目が黒いうちにソ連が崩壊するとは思っていませんでした。もう少し変わった形でソ連が持続するのではないかと考えていました。F S Bやシロビキが支配する現在のロシアに変わっていったわけですね。

僕は非常に参考になると考えているのは、バルト諸国の経験です。ドゥダーエフはエストニア、マスハードフはリトアニアにいた経験があるなどバルト諸国とのつながりはあるけど、バルト諸国の反共パルチザンは、1954年まで森の中で戦っていました。バルト諸国の人たちは1920年代から1941年にロシアやソ連に併合にされるまでの独立時代の思い出を力に変えて生き延び、武力闘争したために彼らはほかのソ連の地域よりも自由を享受していました。ついにそれほど流血をしなくて独立を勝ち取りました。それはソ連が弱体化したという機会をとらえたわけです。



そういった形で戦闘によらないいろいろな戦いが今後組織されていくべきであって、そういう意味ではアブドルラフマン・アフトルハーノフ (1908-97) という人がいますが、日本では『スターリン謀殺』という本とブレジネフ時代に関する本が2冊しか出ていないんですが、1940年代のはじめに西側に逃れてドイツを中心にして、ミュンヘンを拠点にして在独米軍学校の教官をしたりした、チェチェンで生まれた最大の国際政治学者です。彼は晩年にチェチェンの指導者たちに、ロシアからどんな屈辱的な条件をつきつけられても、絶対に戦争だけは避けるようにというアドバイスをし続けて死んでいきました。この戦争をどうやって避けられるのかというのは国の指導者たちの力ではないのかと思っています。

400年間の対立の間、チェチェン民族がたいへんな不幸を被ったわけですが、日本では、その間300年間江戸時代で戦争のない時代を経験しています。そして最近60年間、いろんな問題がありますが、この60年間戦争をしないですんできている。こういった意味での戦争をどうやって回避できるのかという問題は大きくて、そのことと国の発展とどう関係するのかと思っています。

質問者3 (村山)：

完全に質問というより私個人の意見も入りますが、やはり北チェチェンおよびコーカサス地域に平和を実現していくにはどうしたらいいのかということですが、吉本隆明と糸井重里の対談を読んだときに、チェチェンはとても小さい国でロシアという大国と戦って、少なくとも1回は負けなくて、そのときにベトナム戦争と対比していつも考えています。吉本が言ったのは大国が小さい国を圧迫して、自分の言うことを聞かせようというときに、小さい国が大国に負けずにやっていくには、民族の独立というだけでは大国に勝つことはできないということを言ったんですね。大国を越えるような国際社会の中でも高い理想を掲げなくては小さい国は大国に対して勝つことはできないと言ったのですが、チェチェンにはそういう理念にあたるようなものがあるのでしょうか。

菊池：

理念といいますと、今のところ内部での分裂が進んでいますから、純粋なチェチェンの独立を願っている人と、北コーカサスでのイスラム国家建設を望んでいる人といろいろいます。武力の道だけで行こうとしている人たちと政治的な解決を望む人たちなど分裂しています。カディエロフ政権やチェチェンの住民のように、とりあえずロシアに従っていかうという人もいます。

国際社会は、本当は介入もできるけどロシアが怖い。ロシアと仲良くしていたほうがいい。各国の意見によって国際社会の意見が左右される。たとえば北方領土はアメリカの地図では日本領、ヨーロッパの地図ではそうになっていない。それがその国の国際関係における立場です。統制化が強まっている状況で反政府的なことをやると排除される。

国際社会の今のシステムにはあまり期待できないので、バカだといわれている若者たちの動きにとっても注目しています。もちろん警察内部などからの反政府的な動きも注目しています。このまま反政府運動が盛り上がり上がっていくしかないと思っています。そして一般の人たちが私たちの側につくことが国際社会に勝っていくことではないかと思っています。

伊藤：

私は帝政ロシアだけでなく、ソ連共産主義時代、プーチンになっても変わっていないというところから、ロシア民族の体質にたどりつくのかと悲観論になるのですが、ロシア民族の政治的体質を見ると、外交も内政も一言で言って弱いものいじめ、別の言葉でいうと、非常に政治的な力関係に敏感である、従順である。理想とか原理とか理念ではなく、力関係で押し切れるならほかはあとからついてくると。

北方領土についても第二次世界大戦の戦利品だから自分たちのものなんだと、どこにも通用しない理屈で説得できると思っているじゃなくて、力関係で日本を押しさえ込んでいけば理屈は何でもいいんだと考えているロシアの体質を反映しているのです、その体質をみなければならぬ。ところが二つの面で変化が起こりつつある。ひとつは力関係の計算で、前はむきだしの軍事力、武力で何でもできたんですね。

一番典型的なのは帝政ロシアの末期で、ポーランドを分割してみたり、日露戦争の前にロシアが日本にかけていた脅し、ツァーはいとこであるプロシア皇帝にこの戦争は3ヶ月以上かからない、なぜならロシアが処理するからと言っていたわけですが、ソ連時代にも独ソ不可侵条約でポーランドに同じようなことをした。力が許せばどこまでも広がっていくというのが帝政ロシア、ソ連、プーチンロシアにもそれが見えたんですけど、力の論理が変わってきて、たとえばグルジアの騒ぎですね。

昔の帝政ロシア、スターリンのソ連であれば、一気にグルジア全体を制服してあとは知らん振りということだったと思うけど、今回はアメリカが人道支援という名目で物資を積んだ輸送機をグルジアに送り込んだのを見て非常に敏感になったんですね。グルジア本土にもぐりこんで様子を見る構えになったんですけど、そのあとアメリカがダメだといって〇〇〇を派遣した。これがダメ押しで、グルジアからさっと引いた。

それからソ連崩壊後、連邦構成共和国の独立をいちおう全部認めました。エリツィンという人の考え方を私は異質だと思っていますが、その影響もあってプーチンになって先祖がえりしていくところまで行くと、独立した連邦共和国といえどもどうなるかわからないという面もありえますが、国際関係の政治的計算は単純な計算だけではできないといえますから、その面で将来チェチェンに希望がないわけではない、ロシア社会自体も今プーチンの下でそういうことになっているが、エリツィンの時代を経て力さえあれば何を言ってもいいんだという時代ではなくなってきたという、これは時間の経過が必要かもしれませんが、みれると思います。

私はロシアについてもそういう変化のファクターがあるということを考えると、岡田さんがおっしゃったようにこの問題はチェチェンだけでなく北コーカサスのイスラム教徒の人民たちというのはみんなロシア人じゃない、それをなぜロシアが支配するのかという、日本民族が朝鮮民族を支配し続ける権利がないのとま

まったく同じです。今後400年のタイムスパンで見れば、結局最後にはロシア民族も血を流しながら異民族を支配し続けることのおろかさに気づくときが来ると思っています。日本人があまりにも正義や国際的理念というものに対して無関心、あるいはご都合主義というか、チェチェンでの残虐なジェノサイドだと思って見てましたけどね。日本人の間からそれをストップしようという声がほとんど聞こえない、チェチェン連絡会議に集まる人たちからしか聞かれない。これは本当に情けないことだと思います。ロシアのチェチェン問題だけでなく世界にはまだまだ植民地主義、帝国主義みたいなものが残っていてそれを日本人がどう受け止めていくかという問題だと思います。

岡田：

ありがとうございました。

村山さんがおっしゃられた対抗軸はあるのかということに対して、僕はあると思っています。唯一日本語で読めるのは『チェチェン民族学序説』で、いろいろとあの本に問題はありますが、ぜひ読んでいただきたい本です。そこで書かれているウェズデンゲルは、一般的に「アダート」と呼ばれている慣習的な道德律のことです。

なぜウェズデンゲルという言葉で私が呼ばないかというと、それはチェチェン語でもほとんど死語になっているからです。それに対して「アダート」という言葉は、イスラームの言葉として習慣法としてとらえられています。これはイスラーム教徒だけではなくコーカサスの諸民族は同じような普遍的な道德律を持っています。日本人の多くは共感できるような古いユーラシアの諸民族が培ってきたような伝統的な道德律ともいえます。それに気がついたのが寺沢潤世というお坊さんであります。

「アダート」は、非常に人間적におもしろいもので、結局そういうものが忘却されていった結果、チェチェン人の間でもおかしいことが起こっているわけです。そういったものの理解が再構築されれば、コーカサス諸民族全体の団結が実現できるのだと思っています。コーカサスは、人種的にも、宗教的にもまちまちです。イスラーム教徒だけではなくキリスト教徒であったり、ペルシア系もいたりして民族的にもバラバラです。そういうところの民族が団結してひとつのコーカサスということで団結できるのではといろいろな人が唱えてきました。

将来この地域が戦争と無縁な平和な地域として繁栄する可能性があるかと僕は考えています。非常に温暖な気候で美しい自然があり石油もとれ、天然資源にも恵まれている、現在の状況はロシアの圧迫でグルジアは最貧国のように言われますが、ポテンシャルは非常に高いのではないかと。アゼルバイジャンだって非常にいい要素を持っています。黒海沿岸にも素晴らしいリゾートがありますし、平和をどう実現できるのか、日本もどういうことで貢献できるのかということを考えればいいのではないかと思います。